

第2回「森林づくりの担い手対策に関する検討会」議事概要

1 日時及び場所

令和6年12月16日（月）14:00～16:00

第二水産ビル 3G会議室

2 出席者

○委員

早尻委員、高篠委員、佐藤委員、鈴木委員、久村委員、持田委員、秋保委員、奥村委員、福井委員、田中委員

○北海道水産林務部

寺田林務局長

（林業木材課）本阿彌課長、沓掛課長、二本柳課長補佐、相馬課長補佐、安元係長、仲澤係長
（北の森づくり専門学院）宮田教務課長

3 議題

1. 情報提供

- （1）令和7年度北森カレッジ入学試験の状況について
- （2）令和5年度林業労働実態調査の概要について
- （3）北森カレッジ卒業生の就職後の動向について

2. 第1回検討会での意見について

3. 北森カレッジの取組評価について

4. 技能検定制度の普及について

5. 外国人材の受入・活用に向けた検討について

6. 中間報告に向けた今後の検討方向について

4 主な意見

（北森カレッジの若年層へのアピールについて）

- ・高校を卒業して就職することと、北森カレッジを卒業して就職することの大きな違いというところを明確にしていかなないと、PRしても難しい。
- ・高校生は近い世代の人の話が心に響くと思うので、北森の卒業生や在校生など年の近い先輩が、地域の協議会などで話をする機会があると良い。

（北森カレッジでの学び直しについて）

- ・2年間送り込むのは負担であるが、1～2週間など短期間であれば、再教育ということで、体系的に技術を教わる機会がなかった従業員を送り出したいと思う企業はたくさんあるのではないかと。そうすれば北森カレッジの利用の幅も広がる。
- ・北森カレッジでの学び直しは、企業がベテランの従業員を送り込むきっかけになり、学び直しをする人と北森の生徒が交流する機会を作れば、情報の共有や学びが促進される。
- ・木材産業も労災が多いので、林産コースのようなものがあると良い。

(高校生の就職、林業への就業について)

- ・最近の高校生は、友達グループで同じ職場に就職する傾向が強い。どこの業種・業界も人を欲しがっていて、募集人数より多い人数が来たとしても、皆採用してしまうので、友達に引っ張られて就職する生徒もいる。
- ・高校生は、セミナーでつながりがあるなど、あらかじめ知っている企業に就職することが多い。
- ・高校生で初めて林業を知る生徒が多いが、高2ぐらいで林業という選択肢が急に入ってきてても選べない。小・中学校の若い世代のうちから、定期的に木育を続けていくことが重要。
- ・高校生に説明会で話を聞いてもらうだけでは、リアリティを感じさせることが難しい。林業機械やチェーンソー、シミュレーターを持って行き、実際に乗せたり操作させたり、継続して説明することにより、高校生でも興味を持ってくれる。
- ・小・中学生も含めて若い人たちが「林業って面白いな。」となるよう、北森カレッジ卒業生もいろいろなところでアピールをしていく必要がある。
- ・公務員も含め、林業における人材確保は厳しい状況。林業の魅力をもっとPRしていくことが重要。

(技能検定について)

- ・検定のメリットが弱く、検定を取っても取らなくてもあまり変わらないように見えてしまう。技能士が伐った木でなければ流通に乗せられないような厳格な制度とすると、各種研修の受講に支援が受けられるなど、目に見えやすいメリットが必要。
- ・技術レベルに基づいて作業するということが広がっていけば、能力評価として、資格や給与に反映することができるツールの一つになる。
- ・会社や業界として「技能検定を取らなければならない。」となるように、メリットを示しながら受検を強く促進すべき。
- ・熟練者は太い広葉樹の伐倒など高いレベルの技能を有している方もおり、技能検定制度も、高度な技術を評価していくなど、もっと厳しいものにすることが必要。
- ・検定制度を活用する若い世代とベテラン勢でハレーションが起きないように、これまで技能検定に合格する訓練をしていないベテランの方に、再教育の機会として技能検定を受けてもらえる仕組みを考えなければいけない。

(外国人材について)

- ・担い手が足りない造林・育林分野は、夏場で雪のない時期に行う作業が多く、外国人材を造林・育林分野のみで雇用するとなると、通年雇用が難しい。また、種苗のみで通年雇用を維持するのも、現実的に難しい。
- ・外国人材の受入で一番ネックになるのは、コーディネーター。外国人材を探してきて、通訳や生活の面倒をみてあげるような人がいないと、受入は難しいと思われる。